

Different Hormonal Expression Patterns Between Primary Pancreatic Neuroendocrine Tumors and Metastatic Sites

木村, 英世

<https://hdl.handle.net/2324/1654720>

出版情報：九州大学, 2015, 博士（医学）, 課程博士
バージョン：
権利関係：やむを得ない事由により本文ファイル非公開（2）



(別紙様式2)

氏 名	木村 英世			
論 文 名	Different Hormonal Expression Patterns Between Primary Pancreatic Neuroendocrine Tumors and Metastatic Sites			
論文調査委員	主 査	九州大学	教授	橋爪 誠
	副 査	九州大学	教授	須藤 信行
	副 査	九州大学	教授	本田 浩

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

膵神経内分泌腫瘍 (pancreatic neuroendocrine tumors, PNETs) において、複数のホルモンを産生するという腫瘍の不均質性が知られている。そこで、ホルモン発現の観点から PNET のもつ不均質性を評価することを目的とした。4 種類の代表的なホルモンである、ガストリンおよびインスリン、グルカゴン、ソマトスタチンの発現を原発巣、転移巣それぞれにおいて免疫組織化学染色を用いて検討した。対象はリンパ節転移を認めた PNET20 例で、6 例はガストリノーマ、1 例はインスリノーマ、1 例はグルカゴノーマ、12 例は非機能性 PNET であった。20 例中 7 例では同時性肝転移を認め、肝転移巣も対象とした。7 例中 2 例はガストリノーマ、5 例は非機能性 PNET であった。20 例中 6 例に複数のホルモンの発現を認め (30%)、非機能性 PNET12 例中 9 例で少なくとも 1 つのホルモンの発現が認められた。原発巣・リンパ節転移巣間、原発巣・肝転移巣間でのホルモンの発現が認められた。原発巣・リンパ節転移巣間、原発巣・肝転移巣間でのホルモン発現陽性一致率はそれぞれ 50%、11%であった。3 例では原発巣で発現を認めないホルモンが、転移巣でのみ認められた。結論として、ホルモン発現様式は原発巣・転移巣間でしばしば異なることが示唆された。

以上の結果は、本分野における新しい知見を加えた意義あるものと考えられる。本論文についての試験はまず論文の研究目的、方法、成績などについて説明を求め、各調査委員より専門的な観点から論文内容及びこれに関連した事項について種々の質問がなされたが、それに対しいずれも適切な回答を得た。

よって調査委員会合議の結果、試験は合格と判定した。